

『日本女性運動資料集成』 推薦者たちのメッセージ

『日本女性運動資料集成』に寄せられた推薦の言葉
(不二出版カタログより):

すでに他界された人も多い。
資料集成の刊行に寄せられたメッセージは
1990年代の女性史をとりまくバックグラウンドの
ふんいきをそのまま伝えており
これ自体が女性史の貴重な資料となっていると考え
収録する。
(編集部)



戦争と性差別の歴史を見つめなおす 土井たか子(八雲院議員)

❖ 敗戦の年、一六歳だった私は焼け野原に立ち、戦争が一番弱い女や子供を最も悲惨な目にあわせることを実感しながらも、新憲法が生まれ、民主主義が現実のものとなり、女性が初めて参政権を手にした——その新しい風をつけて帆をいっぱい張って大海原に突き進むような感じを抱きしめていた。

❖ しかし、実は戦争は、戦後は終わってはいなかった。敗戦後五〇年近くたって初めて「従軍慰安婦問題」が大きく取り上げられるようになったのもその象徴的な事柄である。この問題こそ日本人の侵略戦争へのそして性差別への認識の問題なのではないか。

❖ 今回刊行される『日本女性運動資料集成』の編者が、「従軍慰安婦」問題で日本人の戦争と性の問題をすどく追及している鈴木裕子さんであることは偶然ではない。鈴木さんは人も知る女性労働運動史のエキス、パートであるが、「従軍慰安婦」システムは日本固有の公娼制度にその根がある歴史的観点から解明を試み、また戦争に協力することで参政権を得ようとした女性運動の旗手たちの限界を、敬愛のまなざしと共に見つめることを忘れない、これからの女性史研究を拓く学究である。日本の女たちが自分の立っている地点をしっかりと見極め、自分の歴史を自分のものとするために、本書の刊行はまさに待望の書といえよう。



女性史研究のための宝庫 松尾尊允(京都桃女子大学教授)

❖ 日本近代女性史の各分野にわたって数々の業績をあげてこられた鈴木裕子さんが、このたび、長年の蓄積を生かして、女性運動の資料集成を編集して世に送られることになった。

❖ その内容は、時期でいえば自由民権期から一五年戦争期まで、分野でいえば、労働組合運動・社会主義運動・無産婦人運動・農村婦人運動・職業婦人運動・部落解放運動・廃娼運動・産児制限運動・婦選運動等々多岐にわたる。とくに、これまで比較的研究のおくれていた戦時下の、女性労働運動や官製婦人団体、さらには国民精神総動員運動や勤労動員の関係資料が数多く含まれているのが注目される。

❖ 歴史を、あるいは歴史から学ぶには、直接史料に当たるのが一番である。居ながらにして、これまで世に現われなかった重要な史料に数多く接する機会が与えられるのは、まったく有難い。近年女性史研究の進歩はめざましいものがあるが、そのさらなる発展に、このたびの運動資料集成の刊行が、大きく貢献することは、疑いをいれぬところである。



米田佐代子 八山製菓立女子短期大学教授



上野千鶴子 八重文科大学社会学科助教授

女性史の論争を豊かに

歴史学界で女性史という分野がようやく注目されはじめたころ、女性史研究のための基礎的な資料はほとんど公刊されていなかった。それまで一級資料とされてきた公文書や政治・経済関係の記録類には、女性が登場することも少なかつたし、女性の立場が考慮されることも皆無に近かつたからである。ただでさえ研究条件にめぐまれない女性史研究者が、さらに地を這うような努力で新聞や雑誌から資料を掘り起こさなければならぬというのが、これまでの実情であった。

最近になっていくつかの資料が公刊がすすんできたが、今回の『日本女性運動資料集成』は、女性史の中でもスポットのあたりにくい労働運動や消費組合運動、水産社や日本共産党の活動、戦時下の翼賛運動までひろげた資料集になるところで、おおいに注目される。女性たちの運動にはジグザグのコースがあり、評価はむずかしい。戦時下の女性の動きなどは、このところ大きな論争となっているテーマである。この資料集は、そうした議論をさらに盛んにする上で役に立つと思うし、これが引き金となって新しい資料の発掘がすすむこともあるだろう。

そのことは、女性史だけでなく日本の近現代史像を見直すことにもなると思うのである。

女性運動史を功罪ともに見つめるために

日本には、戦前からつよい女性運動の伝統がある。「大和撫子」のステレオタイプに反して、日本の女性たちは、明治の初めから自由民権運動の一翼をなつてきたし、その中から女性運動や男女同権思想も、早い時期に成立した。「青鞥」の女たちは、なにも突然変異の産物ではない。彼女たちの背後には、婦人参政権運動や、矯風会の腐爛運動などがあつた。エリート的女性たちはばかりではない。あの米騒動をひきおこしたのは女の力だつたし、女工の労働争議を組織する労働組合運動や、非合法の共産党の運動に身を挺する女性たちもいた。

だが、女の運動は、いつでも男性支配を否定し、被害者を救済する運動ばかりとは限らない。一五年戦争下では、国策協力の大政翼賛体制にすすんで巻きこまれていったのも、女の運動だつた。女性運動を、その功罪ともに見すえて冷静に振り返らねばならない成熟した歴史の視点を、ようやく持つてきたわたしたちは、不出版から刊行される『日本女性運動資料集成』はそのための、かっこうの素材を提供してくれる。編集の労を多としたい。



歴史的な刊行をよめること 住井する(八重文)

女性史というこれまで、有名女、はなやかな女性を取り上げたものが多かった。今度刊行される『日本女性運動資料集成』は、底辺の女たち——女工や女給、娼妓、部落の女性など——の活動を中心に集められている。一番大事な部門であるのに出版するには一番遅い、そうした出版がなされるのが、自分のこのまじりに嬉しい。

全二〇巻の目次をみると、一九〇二年生まれのわたしには、自分の青春史を辿っているような気がしてくる。わたしは戦前も戦後も国の権力に真向かってきたけれど、思えばその歩みは単純ではなかつた。「婦人職線」の活動も中途半端で恥ずかしい気がするし、戦争反対に徹すべきだった農民運動がついに抵抗しきれず、国策に沿って行くのを目で見たことだつた。

農民文学の会合で東京に行き、時の政治家にもねる作家たちの卑屈さにくやし、思いをしなから、まっくらな牛久沼治いの種をあるいて帰つたのを覚えてる。だが、わたし自身も無力で、思想のある童話を志すのが精一杯だつた。

この資料集は戦前を対象としているせいもあって、今の女性はずいぶん不自由な時代だつたのだろうとあきれられるだろう。けれどもあながちそうでもない。なぜなら、いまだって天皇を頂点として、差別は厳然としてわたしたちの前に、社会秩序面で立ちはだかつていることだから。これとの闘いの戦略、戦術のためにも、私たちは過去の失敗にも学ばねば、と思つ次第である。



叛史としてのHERSTORY

歴史(History)はいつも、彼の物語(History)ばかりだつた。そこには、女がいない。存在しながらも、消されてきた。

自由民権期以降から、敗戦までのおよそ八〇年間、激動の近代を女たちがいかに消されてきた一人称の自分を取り戻していったか。

幕らしの場で、労働の場で、家庭で、それぞれの女たちが繰り広げた運動の歴史は、そのまま「叛」の文字を取って自らに受け入れた女たちの、個々のHerstoryの記録でもある。

彼女たちの日々を辿ることで、私たちが、私たちが、どこに居るのか、どこに向かおうとしているかを再確認することができる。

被害性もともより、戦時の加害性も含め、女たちの確かな運動史を集めた本書は、決して過去完了したものではなく、私たちの今と未来に繋がる現在進行形の姿を映し出していると見えるだろう。



女性と社会の未来を拓くために

金森トシエ (元 読売新聞社婦人部長、編集委員、前単立かながわ女性センター所長)

過去に目を閉じる者は現在に対しても盲目になる」とは、第二次世界大戦終結四〇周年にあつたのワイツゼッガー、西独(当時)大統領の言葉としてあまりにも有名なが、それは新聞社で婦人部記者として約二〇年間働いた私の胸にも深く響く言葉であつた。

さまざまな女性問題の取材を通して、それらが基本的には女性の人權、伝統的性別役割分業にかかわっていることへの私の思いは、近代の女性史をたどつて紙面で「おかあさんの百年史」など幾たびかの企画連載を試みる作業へつながつていった。さらに第二の職場となつた女性センターで神奈川女性史一巻を二〇年がかりで編む作業ともなつた。

それは、過去の検証なしに現在への確かな認識は生まれ得ず、現在の確かな把握・認識なしに未来の展望を拓くことはできないと、私が痛感したからである。

大変な努力と綿密な作業を今回刊行される一〇巻は、女性と社会の未来を拓くための貴重な資料であり、関係機関はもとより心ある女性そして男性にも広く活用されることを強く願つている。

女性解放は二代にしてならず

高橋喜久江 (日本キリスト教婦人矯風会)

日本女性運動資料集の刊行を喜ぶもののひとつです。日本の男性優位社会にあつた女性運動はとかく無視または軽視されてきたように思つていました。ひとつはこれは女性に限らないのかも知れませんが、運動の記録をのこすことに意を用いず、目前のなすべきことに多くの時間と労力を割いてしまつことが、結果として記録することをおろそかにすることに、後代の評価が高くない原因にもなるというわけです。これは自戒をこめての感想でもあります。

このたびの不二出版による刊行は、従来の不備を補正する点からも歓迎するものです。とくに今後の歴史を担う若い女性たちが、先輩たちが現代と比べものにならない苦境の中で——健闘してきた経験に女性選挙権も財産権も結社の自由も制限されていた時代なものですから——健闘してきた経験に学び、次代に活かして下さることを切望します。「女性解放は二代にして成らず」なのです。



私たちの人権確立の足あとを辿る

もろさわ まよ (元 女性史研究家)

日本の近代は働く女たちにとっては、夜明け前の闇。封建的男女差別のくびきにきびしくつなげられたまま、資本制の利潤追求のくびきにもまたつなげられた女たちは、文明開化の幽車を、空落の底で牽引する働きを重くになわされている。

自由と平等、基本的人権の確立を目ざして世界史の近代は開巻しているが、日本においては、「王政復古」がかけられ、うしろ向きに近代が開巻、その歪みのしわよせは、女たちにまたもつとも重い。

この重圧の中から光りを求めて身じろいだ女たちのうごきや解放像のありようなど、それに力をつけた男たちのうごきもふくめて編集されている本資料集は、女たちの人権確立の足あとを辿る上で、欠くことのできない貴重な資料集であり、先人の志をいまにうけつぎ、さらなる新しい状況を創りだすためにも参考になることすこぶる大きい。

「負の歴史」を繰り返さないために

加納実紀代 (元 歴史研究家)

なんともおどろくべき企画である。

ここに集められたほう大な資料には、マスメディアで活字になつていくものだけでなく、片々たるパンフレットやビラの類も多い。それらを収集し取捨選択し分類し、全一〇巻にまとめ上げる編者と版元の労をおもつとき、ぼう然とし慄然とし、ついでふかく頭をたれ、そして肅然として襟を正す。

この一〇巻には、戦前日本の性抑圧と階級抑圧に抗して立ち上がった女たちの魂の叫びと苦闘の歴史がぎっしり詰まっている。長年女性運動史を奮闘に努力を傾けてきた編者ならではの内容だが、さらに貴重なのは、民族抑圧に抗した朝鮮人など在外日本人女性の闘いの軌跡や「昭和」一五年戦争と女性運動の関わりを不す資料が収められていることだ。

性抑圧に抗して闘ってきた女性たちが、つよまるファシズムのなかで後退戦を余儀なくされ、ついに戦時体制に飲み込まれて民族抑圧の荷担者となつていく。とりわけこの過程を明らかにする第一〇巻は、残念ながら、過去の歴史としてでなく現在の意味を持つ。

日本のフェミニズムがこうした「負の歴史」を繰り返さないためにも、本資料集の一冊も早い刊行が待たれる。